博学連携の実践から歴史教育を考える

兵庫県立神戸特別支援学校校長
陶山　浩

1．はじめに

⑴「歴史総合」が重視する点

新課程の目玉科目である「歴史総合」は，「総合」を冠した科目であり，単に世界史と日本史を「統合」した科目ではない。①現代的課題の解決を視野に入れる，②広く相互的な視野から世界と日本をとらえる，③歴史の大きな転換に着目して現代的諸課題の形成にかかわる近現代の歴史を考察する，つまり，現代的関心からの歴史的考察が重視されている。

内容の構成は，テーマ的構成となっており，テーマ設定の視点は，近代化，大衆化，グローバル化，現代的諸課題と関わっている。

授業の構成は，歴史の大きな転換に着目し，単元の基軸となる問いを設け，資料を活用しながら，歴史の学び方(「類似・差異」「因果関係」に着目する)を習得させる構成になっている。

本稿では，「歴史総合」における実践に関連して，「博学連携」について検討していく。

⑵ 学校と博物館との関係の変遷

まず，学校と博物館との関係が変化し続けていることにふれておきたい。当初は，「学社連携」という関係で，学校教育と社会教育(家庭教育も含む)とが相互補完的に協力し合う関係であった。

次に，文部科学省が推進した「学社融合」では，学校教育と社会教育が部分的に重なり合う関係となって，その関係を一層強化しようという観点での展開が構想された。これは，いわゆる地域社会学校の理念に重なっている。しかし，学校現場での実践はほとんど見られない状況である。

そして現在は，「博学連携」という関係で，博物館と学校教育との連携事業が展開されている。博物館の利活用を類型化すると，①行事型，②授業型，③研究型の三つに分けられる。

①の行事型は，例えば，博物館の空間を利用して吹奏楽部が演奏し，博物館来館者の雰囲気づくりの提供を行うといったものである。また，小学校で多く展開されているのは，校外学習の見学場所として活用されるものである。

②の授業型は，博物館に来館して，見学(ワークシート，学校団体の受け入れプログラム)，体験(組紐・勾玉づくりなど)の提供などを受けるものである。博物館が館外で実施するものとして，出前授業(アウトリーチ)があり，学芸員の専門性を活用してティーム・ティーチングを展開したり，収蔵資料(レプリカを含む)を貸出教材として提供したりするのが一般的活用のスタイルである。

③の研究型は，課題研究を行っている学校で実践されているケースで，学芸員が歴史学の研究過程を教授するものである。その他のものとして，教員を対象としたセミナー(教育委員会認定の教員研修の一環など)が開催されている。また，博物館側が教員とタイアップして，博物館資料を活用した授業実践を研究としてまとめる取り組みもある。

⑶ 博物館の情報発信

文化庁の広報誌「ぶんかる」では，全国各地の博物館での取り組みが掲載され，学校現場で活用するための多くのヒントが発信されている。また，兵庫県においては，兵庫県博物館協会加盟館が142館(2020年度現在)あり，そのうち47館(33％)は歴史系の博物館であり，学校教育への支援・連携などの情報が掲載されている。

このような形で博物館の情報発信がなされており，博物館側からの博学連携は確実に進んでいる，しかし，高校現場で博学連携の教育実践が行われないのはなぜか。兵庫県立歴史博物館が実施した「教員セミナー」のアンケート結果から見えてくるのは，①近くに博物館がない，②教科書の内容を教えることで精一杯である，③博学連携で何が改善されるのかがわからない，④自分自身が博物館に行ったことがない，などの意見である。このうち，教師がその気になれば変わるものは，②③④の意見である。また，①についても，博物館のデータベースや学芸員

からの専門知識の提供などの活用の余地が十分にある。

2．博物館を活用するメリット

博物館資料の教材化についてのヒントを考えると，以下のものを挙げることができる。

①実物（モノ）を見ることが可能
②専門的な見方を知ることができる（実物の見方，他時代，同時代の類似作品などと比較する見方，裏側を見るなど）
③五感（見る，聴く，触る，嗅ぐ，味わう）に訴えることができる
④時代をまとまりとしてとらえることができる
⑤地域の情報を収集しやすい（地域史の拠点になっていることが多い）
⑥学校団体向けプログラムの提供
⑦教員向け研修講座の開催（教材化のヒントがある）
⑧生涯学習の拠点としての活動を行っているところが多いので，学校教育の枠を超えた教材化が可能
⑨ゲスト・ティーチャーとして，最新の専門的な学術情報の提供が可能
⑩教科書のとらえ方と違う歴史像（観）とのすり合わせが可能
⑪文化財保管・保存の実際を知ることができる
⑫歴史に関する情報センター的役割を担っていることが多いので，調べ学習の実際に適している

また，博物館が歴史教育に有効であるのは，実物資料を多く所蔵し，学芸員によるわかりやすい解説を加えた資料が展示されている点である。そのことによって，歴史に詳しくない者でも，展示資料が意味をもち，歴史をひも解くヒントにつながるのである。

実物資料は，歴史教育において次のような効用があると考えられる。①歴史的事象を生徒自ら確認できる，②実物を見る，触ることなどによって，すでに知っている知識について新たな発見の可能性がある，③実物を見ることによって生じる疑問を学習課題として取り上げることができる，④実物資料を比較することができる。

実物資料を含めて歴史教育にアプローチさせることは，歴史教育に携わる者の醍醐味であるといえる。

3．歴史学習に組み込む博物館の活用

⑴「博物館の見方」を学ぶ歴史学習

校外学習で博物館を訪れた小学生の様子を観察すると，引率の先生が「自由に観覧しなさい」という指示をした場合，30分も経たずに先生のもとへ戻ってくる児童が多い。高校生であっても同様の結果になると思われる。その理由は，何をどのように見るのかという，いわゆる「博物館の見方」を学習していないからである。スポーツで言えば，ルールを学ばずして試合に臨んでいるようなものである。このことは，大人になっても同じであり，博物館，特に歴史系博物館の入館者数が伸び悩んでいる原因の一つであるとも考えられる。

以前，小・中学校の教員研修会で「兵庫県立歴史博物館に来たことがありますか」という質問をしたことがある。結果，「来館したことがある」という回答は2割に満たなかった。児童・生徒を引率する以前に，教員自身が博物館を利用することがないのである。これは，自ずと歴史教育のツールとして博物館を活用しようという発想にはつながらないと考えられる。そのため，各博物館では，教員向けの講座を用意しているが，受講人数については低調な結果となっている。

では，どうしたら，博物館を利活用することにつながるのか。やはり，年度初めの「資料」を扱う際に，実物資料に遭遇することができる博物館の意義について検討する必要がある。資料活用をふまえた授業構成を考えれば，実物資料が存在する博物館に足を運ぶ行動へとつながるのではないだろうか。大げさな言い方かもしれないが，そのことによって，生徒のこれからの人生において博物館という存在が意味をもち，学校教育から生涯教育への橋渡しを行うことができるのではないだろうか。

⑵「博物館の見方」の具体例

次に「博物館の見方」の具体例について考えてみたい。博物館の実物資料は，常設展や特別展などでわれわれの目にするものとなる。展示の方法は，時系列，テーマ別，比較など，展覧会を担当する学芸員の意識が如実に表現されることになる。それを把握したうえで個々の展示物を見れば，「なぜ，ここに，この作品（歴史資料）があるのか」が理解できる。そのうえで，個々の展示物，例えば仏教絵画の見方，

絵地図の見方，考古資料の見方などの専門的な見方を，教員から生徒に情報提供できれば，さらに理解が深まることになる。

博物館での学習のタイプとして，次のようなものが挙げられる。

①課題発見型（学習課題を発見し，調査活動につなげる）では，博物館を訪れ，展示物を鑑賞するなかで，疑問点やさらに追究したい事項について発見し，調査活動につなげる。例えば，城のジオラマを鑑賞し，「天守が残っているのはなぜだろうか？」という問いから，探究活動につながっていく学習である。

②問題解決型（事前に学習課題が存在し，調査活動として博物館を利用する）では，学校の学習活動のなかで，確かめたい学習課題について，博物館資料や学芸員の説明によって解決していくものである。例えば，資料に基づいて年代の確定を行っていくが，その方法などを理解することによって，歴史の確定のプロセスを探究する活動ができる。

③調査活動型（事前に学習課題が存在し，博物館を利用して調査活動をする）が問題解決型と違うところは，実際に調査活動をするところである。古文書から事実をひも解く醍醐味を体験したり，絵画資料に潜む歴史を解読したりするものである。

④学習整理型（事前に学習課題が存在し，調査活動の確認として博物館を利用する）では，すでに学習課題に対するプロセスがあり，その事実確認や歴史資料の確認などを行うために博物館を利用するものである。

⑤発展学習型（事前に学習課題が存在し，調査活動をしてまとめて，そのまとめに基づいて博物館を利用する）の例となるのが，兵庫県立相生産業高等学校における銅鐸の制作である。「どのような音が鳴るのか？」という疑問から，博物館の専門スタッフの指導を受けて制作を行った。

⑶ 学芸員と連携した共同学習（研究）

学校教育という面から見た場合，教員は教育の面から，学芸員は学問という面から生徒をサポートすることになる。両者の連携によって，学習効果が向上することになる。学習に使用するワークシートの共同制作や，学芸員と教員によるティーム・ティーチングなどが実施されている。

⑷ 博物館の取り組み

①貸出教材の提供

神戸市立博物館では貸出教材リストがあり，教員との打ち合わせで学習上の効果があると判断された場合，貸出教材が活用されることになる。貸出教材を持ち込むことによって，生徒の驚き，疑問の喚起，視点転換などの効果がある。

②教育利用説明会

博物館の教育資源が学校教育にとって有効であることを，具体的な場面を提示して説明するものである。博物館を利用する前に，学校担当者がこれを活用すると大きな効果が見込まれる。博物館には，学校教育のコーディネーター的役割を果たすスタッフが配置されている。学校現場に在籍していた者も多く，さまざまなヒントを与えてくれる。

③博物館活用講座の実施

具体的には，博物館のバックヤード・ツアーや美術作品の鑑賞講座など，普段目にすることが少ないエリア・領域に関する講座が用意されている。教員向けの研修講座が長期休業中に設定されていることも多い。こういった講座などが，教員の思考を広げる絶好の好機だと考えて，講座に参加することをお勧めしたい。教員の思考が広がれば，自ずと生徒の思考も広がり，歴史を重層的・複眼的に俯瞰できる能力の育成につながる。教科書などの一面的な歴史観ではなく，さまざまな切り口から，ある歴史事象について考えさせる授業展開を生徒に提供することが歴史教育に携わる者としての使命である。

④歴史授業づくりのための情報提供

歴史授業をサポートするためのものとして，資料の活用，博物館のデータベースの利用・活用，博物館の人的資源の活用，博物館施設の活用など，教室のなかだけでは展開できない授業構想の提供が行われている。

⑤出前授業（アウトリーチ）

専門的な知見をもつ学芸員もしくは博物館スタッフが学校に出向き，教員とティーム・ティーチングを行ったり，貸出教材を使用した歴史授業を展開したりするものである。

⑥教員との共同による教材開発

貸出教材の活用や出前授業などで，教員と博物館スタッフが歴史授業づくりで共同し，学校の環境だけではつくり上げることができない授業づくりがで

きる。実物資料(考古資料，古文書，絵画資料など)から歴史をひも解き，博物館施設を使用した授業展開の開発など，生徒の思考活動を揺さぶる活動の実践報告が見られる。

⑦ワークシート，クイズ，教師用博物館利用のしおりの提供

博物館では，発達段階に応じたワークシートの開発や展示物の着目ポイントの表示，博物館の施設利用について解説したしおりの作成を行い，利用者への提供を行っている。

4．おわりに

⑴ 学校知と社会知の橋渡しとなるもの

今回の学習指導要領の改訂には，次の四つの特色があると考える。

第一に「社会に開かれた教育課程」の実現を掲げていることである。つまり，社会とのつながり(社会知)を求めていくことである。

第二に，資質・能力育成型教育課程への転換を目指していることである。目指されている資質・能力として,「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱が掲げられており，カリキュラム・マネジメントを通じて各教科と教育課程全体を往還させることを求めている。

第三に，教科等の特質に応じた「見方・考え方」が整理されることである。各教科における「見方・考え方」を体系的に示すことにより，発達段階間の系統性，教科間の関連，教育課程全体との関連などが整理可能となり，教科指導のポイントが明確になった。

第四に，学習において「主体的・対話的で深い学び」を求めていることである。従来の学習指導要領では，指導方法に関する学びの姿は示されてこなかったが，今回の学習指導要領では，資質・能力育成の実現を重視することもあり，学びの姿を教育課程全体で追求する姿勢を貫いている。

⑵ 博物館の存在を意識する

高等学校の歴史学習においては，博物館を意識せずとも学習活動は展開できる。しかし，本稿のなかで，教育的資源としての博物館の有用性を認識していただいたと考える。有用性を認識しているのに，それを活用しないのは，もったいない話である。教員は，生徒を取り巻くあらゆるものを教育的資源としてとらえて，歴史授業の素材を教材化する活動をしなければならない。

「はじめに」で，教員の本音から博学連携が進展しないさまざまな理由を考えたが，まずは教員自身が博物館を意識してみる，さらには，まず博物館に行ってみることが必要である。博物館に行って感じること，考えること，授業のヒントとなることなどがあるはずである。そのことが授業改善につながるのである。教科書と黒板だけの世界で歴史教育を思考するより，実物資料に語らせたり，推理したり，ストーリーを組み立てたりする視点・内容・方法論があることを実感できるのである。

【参考文献】

・原田智仁編『高校社会「歴史総合」の授業を創る』明治図書，2019.
・「歴史教育と博物館」『研究紀要(第４号)』兵庫県高等学校教育研究会社会(地理歴史・公民)部会，2007.
・糞豊『超・美術館革命』角川書店，2007.
・北俊夫編，埼玉県博学連携推進研究会『博物館と結ぶ新しい社会科授業づくり』明治図書，2001.
・一場郁夫『歴史発見！歴博活用のアイディア』歴史民俗博物館振興会，1999.
・小出宗治『屏風絵の近世日本と世界』歴史民俗博物館振興会，2002.
・加藤公明『子どもの探究心を育てる博物館学習』歴史民俗博物館振興会，2000.
・中村弘，三原慎吾「考古資料を使った授業の実施例」『兵庫県立考古博物館紀要(第４号)』兵庫県立考古博物館，2011.
・木下史青『博物館へ行こう』岩波書店，2007.
・小笠原喜康，チルドレンズ・ミュージアム研究会編『博物館の学びをつくりだす』ぎょうせい，2006.
・国立歴史民俗博物館監修『歴史家の夢』歴史民俗博物館振興会，1997.
・山田朗編『歴史教育と歴史研究をつなぐ』岩波書店，2007.

＊筆者は，兵庫県立歴史博物館で，平成16～19年度において，普及課の指導主事として教員の研修等を担当した。